

移民・難民の定住に果たすエスニック・コミュニティの可能性
～シドニー近郊在住ミャンマー・カチン民族の定住・宗教コミュニティに焦点を当てて～
The possibility of ethnic community for immigrants and refugees to settle in host
community -focusing on Myanmar Kachin community which have made contribution
to settlement and religious activity in Sydney suburb

大学院人間文化創成科学研究科
ジェンダー社会科学専攻 M1 内山 みどり

1. 要約

(和文)

本調査では、オーストラリア・シドニー近郊に住むミャンマー・カチン民族の同胞コミュニティに着目し、コミュニティの実態と人々の関わりについて、参与観察と聞き取りから明らかにした。そこでは、永住者としての生活をすでに確立し、在日カチン・コミュニティにみられる政治活動よりも信仰活動に重きを置いたコミュニティとの関わりが見えてきた。

(英文)

In this research, I clarified how Myanmar Kachin people living in Sydney suburb participate in their own ethnic community and described how the community is made by them, conducting participatory observation and interviewing. There they have already established their own life as permanent residents and more involved in faith activity rather than political activity. On the other hand, Kachin people in Japan are more involved in political activity. It is partly because of their unstable residential status in Japan.

2. 現地調査期間：2017年12月9日～2017年12月30日

3. 調査背景

祖国を離れた難民たちは、それぞれの地でエスニック・コミュニティを持ち、国家や自治体から提供される制度的な支援とは別に、コミュニティ内での支援関係も築いている。そのようなコミュニティは、各国に定住するミャンマーの少数民族であるカチン民族にも存在する。

(1) ミャンマーについて

ミャンマーは、135もの民族を抱える多民族国家である。全人口の7割近くをバマー(狭義のミャンマー民族)が占め、その他人口順にシャン、カレン(カイン)、アラカン(ラカイン)、モン、チン、カチン、カヤー(カレンニー)の7つの少数民族が居住している。人口の約9割が上座仏教を信仰し、残りの1割はキリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教、精霊信仰の信者である。うち、キリスト教徒の主な民族構成は、カレン系、カチン系、カヤー系、チン系である。

(2) カチンについて

カチン民族は、元来ヒマラヤ山脈付近に起源を持ち、現在のミャンマーのカチン州およびシャン州北部、中国雲南省、インド北部のアッサム地方に居住する山岳民族である。そもそも「カチン(Kachin)」とはJinghpaw、Maru、Lashi、Atsi、Lisu、Rawangの6つの言語集団の総称を指す。しかし、「カチン」はミャンマー語であるため、自らはJinghpaw語で「Wunpawng」と名乗っている。特にJinghpawに属する人の数が多いことから、Jinghpaw語が共通言語となっている。しかし、彼らにとって言語集団による区分より重視するのは祖先を共通とする伝統的な氏族制度である。それは、言語集団に横断的なものであり、カチン民族であればみな「Marip」、「Maran」、「Lahpai」、「N'Hkum」、「Lattaw」のいずれかの原初的な家族に属しているということだ。氏族はさらに枝分かれしているが、いずれも5氏族のいずれかが共通していれば、双方が「親戚」関係となる。この氏族制度こそカチンの人々をよくまとめ、親密な社会に作り上げているのだと言える。初対面同士の挨拶では、まず双方ともカチンにルーツがあるとわかると、属する氏族を示す「名字」を問うそうだ。同じ系統であれば、血縁の有無に関わらず「親戚」とみなし、年齢に応じて「おじ」や「お姉さん」といった日本語では血縁のあるものに対してのみ使う呼称で呼びあうという。

長年、多くの少数民族が自治と自決権(self-determination)を主張し、政府と少数民族の間では内戦が長期化している。ミャンマー政府軍は40~50万人の圧倒的な兵力を抱えながらも、ゲリラ戦を展開する数千人規模の少数民族反政府組織が常に対峙している。カチン独立軍(KIA)も少数民族らによる反政府武装組織の1つであり、カチンの統治に関する事柄を扱うカチン独立機構(Kachin Independent Organization、以下KIO)の軍事部門として現在機能している。

1994年に前軍事政権とKIAとの間に停戦が交わされてから17年後の2011年6月、戦闘が再開され、空爆などや村の焼き討ちなどから逃れ、国内避難民キャンプに逃れるカチン民族は増加の一途をたどっている。

1988年に高まりをみせた国内での民主化デモや民族の居住地区での治安悪化を受け、安全を求めて海外に移住するカチン民族も多い。規模の大小にかかわらず、カチン・ディアスポラの主要なコミュニティがある国は、イギリス、アメリカ、日本、マレーシア、イン

ド、カナダ、デンマーク、ノルウェー、オランダ、スウェーデン、ドイツ、チェコ、ルーマニア、フィリピン、タイ、シンガポール、オーストラリア、ニュージーランドが挙げられる。

(3) カチン民族とキリスト教

1880年代、アメリカの宣教師によってカチン民族への伝導が始まった。1966年に外国人宣教師が追放され、カチンのキリスト教信仰の土着化とエスノ・ナショナリズムとの結びつきが強化された。これを担うのが **Kachin Baptist Convention (KBC)** である。信仰活動と **KIA** などとの関わりがカチンのクリスチャンの大きな特徴と言える。信仰活動のネットワークをタイや中国はじめ海外にも持つため、治安情勢の不安定な故郷を行き来する宗教者には身の安全を確保するため軍関係の警護がつくというわけだ。ミャンマー政府による差別を経験したカチン・クリスチャンらの怒りの矛先が政府に向かい、イデオロギー的にもカチン地域での紛争に対して特別な志向を持っていったのは、彼らの信仰に民族主義的色合いが強い所以である (Sadan 2013)。

1948年、ミャンマーが62年におよぶイギリス統治から独立すると、ナショナリズムが興り、英国系ミャンマー人 (Anglo-Burmese) が国を離れてオーストラリアへと渡った。その後、軍事政権下の抑圧に抵抗し、1988年の民主化運動に携わった人たちの出国が高まった。そのため、この時期、“**Migration Refugee Special Humanitarian Programme**” 枠で難民としてオーストラリアに受け入れられたミャンマー人が大半を占める¹⁾。

(4) 在豪ミャンマー人について

オーストラリア政府の発表²⁾によれば、在豪ミャンマー人 (Myanmar-born people) は、2014年6月時点で29,300人であり、海外生まれのオーストラリア在住者の0.4%を占める。男女比はほぼ等しい。2014年度、人道ビザ (humanitarian visa) が付与されたのは2,043人であり、永住ビザ (permanent visa) 取得者全体の86.5%を占める。また、永住ビザ取得者を構成する家族ビザ (family visa) 取得者は7.4%、専門職ビザ (skilled visa) 取得者は6.1%である。このことから、難民枠 (Refugee Category) や特別人道制度枠 (Special Humanitarian Programme (SHP) Category) といった人道的配慮に基づく受け入れが在豪ミャンマー人の背景として特筆すべきことだろう。

2011年の国勢調査³⁾によれば、信仰宗教別では、在豪ミャンマー出身者のうち、仏教徒が6539人 (30.1%)、バプテストが5805人 (26.7%)、カトリックが4491人 (20.6%) となっている。ミャンマーでは仏教徒が9割近くを占める一方で、在豪ミャンマー人のクリスチャンが47%にのぼるという点が特徴的である。人口の民族構成は公表されていない。しかし、人口に占めるクリスチャンの多さから、カレン系、カチン系、カヤー系、チン系の割合が比較的高いのではないかと想定される。

4. 調査目的

筆者は、卒業論文では、難民とみなされる要素を持つ在日カチン民族の語りの聞き取りおよび彼らが所属する政治団体や教会での参与観察を行った。そして、民族アイデンティティと自身の難民性を主張し、日本での在留やカチン民族としての「生き残り」を図る実践を描いた。今回は、定住国（あるいは難民の再定住国）とされるオーストラリアの1都市であるシドニーに場所を移す。カチン民族に焦点を当て、彼らがどのようにしてコミュニティを築き、活用してきたのかを、ホスト社会の対応や制度とのかかわりを含め、聞き取りや参与観察を通じて明らかにする。

5. 調査方法

2017年12月10日から30日まで、オーストラリア・ニューサウスウェールズ州のシドニー郊外にあるミャンマー人の家族のもとでホームステイをした。カチン民族であるホストマザー（以下、ST氏）は、東京で調査者が活動を共にしているカチン民族女性（以下、SB氏）の夫の妹であり、ST氏とSB氏はミャンマーでの高校時代からの親友だった。そのような縁もあり、ST氏の懇意により、彼女がシドニーのカチン・コミュニティへのアクセスを可能にしてくれた。なお、今回はシドニー在住のカチン民族男女7人（聞き取り協力者一覧参照）に対面で聞き取りを行った。スノーボールサンプリング方式であり、聞き取り相手の友人やコミュニティの重要人物として紹介を受けた。聞き取り時間は30~120分で、対象者自宅、浜辺、バーベキュー会場などで行い、相手の日常生活に支障をきたさないよう心がけた。

6. 調査結果

(1) シドニーの「カチン・コミュニティ」

ST氏によれば、彼女が渡豪した1996年当時、シドニーに住んでいたカチン民族はわずか10家族ほどだったという。当時、渡豪したカチン民族は、医者などの“professional visa”の資格以外、大多数は庇護を求め承認されることによって永住権とともに付与される“humanitarian visa⁴”を所持していた。居住人数は公表されていないが、SY氏はシドニーには少なくとも300人、メルボルンには250人ほどだろうと推測している。オーストラリアに入国するカチン民族に関しては、難民・移民の定住機関で働くLL氏と彼女の姉が情報源となっているということがわかった。彼女たちは、新たに同胞の入国者がいるという情報を得ると、空港に迎えに行くなどの手配をし、カチン語あるいはミャンマー語での通訳を担当するそうだ。そこで得た連絡先や移住先をもとに、同胞者の居場所などを把握し、コミュニティ形成に活用しているのだ。また、SI氏によれば、クリスチャンが大多数であるカチン民族が集う場は教会を軸としたFaith Based Organizationであり、それがカチンのコミュニティに相当するという。

① Faith Based Organization

シドニー近郊在住のカチン民族による Faith Based Organization は、以下の 2 団体に大別できる。なお、在豪カチン・コミュニティとしてシドニーに匹敵する規模であるメルボルンにもそれぞれ姉妹団体が存在する。

Australia Kachin Baptist Church-Sydney (AKBC-Sydney)

本部である Kachin Baptist Convention (以下、KBC) をミャンマーに置く。Baptist 派以外の所属を認めず、催しや献金などに関わる判断はすべて KBC からの指令や判断を仰ぐ必要がある。ミャンマー本国では、カチン民族の大半が KBC に所属し、内戦の悪化や政治不安などの緊急事態が発生すると KIA/KIO と結束するため、ときにミャンマー政府から恐れられる存在だと SY 氏は言う。なお、シドニー支部での献金も一定の割合の額はミャンマーの本部に送金されることになっている。AKCF にはほとんどいない 20 代ほどの若者は AKBC に多いという指摘もある。

Australia Kachin Christian Fellowship-Sydney (AKCF-Sydney)

2014 年設立。カチン民族を中心とした宗派によらないクリスチャンのための団体。ミャンマーにも Kachin Cristian Fellowship (KCF) という同系統の宗教団体はあるが、KCF は指令機能のある本部を持たない。現在、20 代前後の高校・大学生や青年メンバーは非常に少ない。LW 氏は、AKCF のメンバーには子どもを持つ中年夫婦が多いと指摘する。

現在、礼拝は Baptist Community Church Burwood を間借りし、他の団体と交代で使用している。AKCF は、毎週日曜日の午後、チャペルで成人の礼拝を行う間、隣接する集会部屋では数名の母親たちによって子どもたちを対象にサンデースクールが開かれる。未就学児から小学校高学年まで 15 名ほどの子どもたちが集まり、カチン語で歌をうたったり、聖書の学びをしたりして成人礼拝が終わるのを待つ。終了後は、集会部屋にて持ち寄りの食事会が行われる。それぞれの家庭で作られたカチン料理が中心だ。

語りの中からは、KBC 直下で運営されている AKBC の体制に疑問を抱き、自己決定のもと、柔軟に信仰活動を行いたいという思いから AKCF に関わるようになったという声も聞かれた。

また、クリスマスなどの集いには、クリスチャンであるか否かにかかわらず、カチン以外の民族も招待し、親睦を共にすることを大切にしている。調査者が参加したクリスマスの集い (Joyful Christmas Celebration) においても、モン、カレン、チン、シャンなど他の民族の参加者が見受けられた。

② General Organization

Kachin Association of Australia-Sydney (KAA-Sydney)

2006年設立。愛国（民族）心を高め、次世代への文化（カチン語など）の継承や政治的活動を行っている。2年に1度、KAA Combined Camp という在豪カチン民族の大集会在開催される。2017年は11月にPerthで開催された。

LW氏は、自身が幼い頃、祖国ではカチンの民族学校や学校でのカチン語の使用が認められなかったそうだ。子どもたちがカチンの言語や歴史、文化を学ぶのは教会だった。ここでは、そのような制約はないかわりに、使用できる建物や時間が限られていると痛感している。そのため、信仰を軸としていないKAAの活動もより人々が集まりやすいAKCFの礼拝に合わせ、日曜日に教会で文化活動を行うことが通例となっている。文化活動が教会で行われると言う点では、祖国もシドニーも同様だと見なす。

渡豪して間もない頃、SI氏の周囲にはカチン民族の知り合いがほとんどおらず、共に同じ言語で語りあう仲間を探していた。彼は、同胞者のほとんどがクリスチャンであることから、教会に行けば何らかのツテを得ることができると考えた。そこで、当時すでに礼拝が行われていたミャンマー人クリスチャンの礼拝に参加し、カチンの人々を探したそうだ。また、カチン以外であれば知り合いを紹介してもらい、少しずつ仲間を増やしていったという。

（2）語りにもみる同胞コミュニティとの関わり

調査協力者への聞き取りからは、それぞれカチン・コミュニティとの関わりや自身の立ち位置に対する思いがうかがえた。

①コミュニティとの距離を意識的に置く人

〈ST氏〉

ST氏は、渡豪してから17年間、カチンのみならず、ミャンマー・クリスチャンやクリスチャン以外のミャンマー・コミュニティに多大な貢献をしてきた。

以前、KBC-Sydneyに呼ばれ、礼拝でのメッセージを依頼された。信仰について語る際、自分にとってより話しやすいミャンマー語を用いると、教会側からカチン語を要求された。そのようなスタンスを好きになれず、それ以降、メッセージを依頼されても応じないことにした。

自分の中にはいつも神様がいて、かつ神様に属している（Belong to）ことに気づいた瞬間、それまで教会や組織といったものいかに帰属していたかを痛感した。カチン・コミュニティにとどまる人たちは、変化や成長を求めている（They don't want to change, they don't want to develop...）。オーストラリアは、多文化国家であり、カチン民族と聞いてわかる人はほとんどいない。そのような環境において、カチンに固執したくも支持したくもない。

カチンの人々は集まり、カチン語で噂話をし、それまでである。残るのは居心地の良さだけ。もうそういったものはたくさんだ。(They just meet, talk together, gossip, all they are talking is gossip. They are talking in Kachin language, they gather together, nothing happens, next day that's it. All about left behind is cozy. Cozy each other. I had enough.)

②コミュニティの大切さを意識しつつも疲れを感じる人

〈LL氏〉

カチンに特徴的な氏族制度によって助け合いの関係が築きやすいということは実感している。また、カチン民族は富裕であったり偉い立場にあったりすると、周囲に分け与えたい、あるいは同胞を助けたい、という気持ちが強い傾向にある。実は、両親ともに「純粹」なカチン民族の血を引く人はあまりいない。両親のいずれかが中国にルーツを持つという人もいる。しかし、たとえ他の民族とのダブルであっても、海外に出て「カチン」だと名乗り、同じ氏族の名字であるとわかれば、その場で「おじさん」とか「お姉さん」と呼んでしまう。「頭の良い、賢い民族」だ。

一方で、カチンの人々と一緒に教会の行事を行うといった時に疲れも覚える。自分自身はオーストラリアに起源を持つ大規模な教会組織で神学や歌を勉強してきたが、企業のようにしっかりとしたマネジメントのもと、メンバーそれぞれが与えられた役割に責任を持つ環境下にあった。この経験ゆえに、カチンのコミュニティとのギャップを感じざるを得ない。自分の役割を持っているにもかかわらず、果たさないばかりかルールや時間を守らない人が多い。中には、親しき仲にも礼儀が必要であることもわきまえず、自分に失礼なことを平気で言うてくることにも辟易している。自分の民族のためになりたいと言う気持ちはあるが、そういった人たちと一緒にいたらくのは嫌だ。コミュニティとしての成長が必要だと感じている。

③コミュニティを行き来する人

〈MN氏〉

夫はカレン人。だが、自分はステレオタイプを持つような人間ではないので、カレン、カチン、ミャンマー全ての教会に参加している。夫はカチン語がわからないので、クリスマスなどにのみカチンの教会に連れて行く。息子にも同様にステレオタイプを持たせたくないと思っているので、ミャンマーの教会を軸としながらも、カレンやカチンの教会にも時々連れて行く。文化の違いを自分で感じとって欲しいと願っている。

④民族アイデンティティの強化・共有にコミュニティの意義を感じている人

〈SY氏〉

自らはミャンマー少数民族の一つであるシャン民族の出自でありながら、カチン民族が多く暮らす地域の学校で教師を務め、カチン民族の女性と結婚したことから自らの人生をカチンに捧げる (I give my all of my life to Kachin People) ことを決意した。カチン民族のロールモデル (I always stay like a role model as Kachin) であり、教会の礼拝時は唯一全身にカチンの民族衣装を着用する。愛国 (民族) 心 (patriotic) が強いと自認しており、英語を話せば話すほど愛国 (民族) 心は弱くなると考えている。そのため、同居している孫たち (NA 氏の子どもたち) にはカチン語を話させ、英語を話すことを禁じているという。

〈SI 氏〉

オーストラリアは政府から提供される移民への支援が充実しているため、移住者はそれに頼ることができる。そのため、自助組織として活動している同胞コミュニティに足を運ぶことへのインセンティブを感じにくく、コミュニティへの参加は魅力的に映らない。そのため、滞在年数の長い自分たちが同胞者にできることは、自身の経験の共有だと思っている。金銭的なサポートはできないが、カチン語で就労経験を語り、生活のガイダンスなどをすることは可能だ。

カチンのコミュニティはまだ第 1 世代によって担われている。自分たちの子どもたちである第 2 世代がメンバーとして活動的になるには少なくともあと 4~5 年はかかるだろう。オーストラリアで生まれ育った子どもたちには、自分たちの両親や祖父母はカチンを背景に持っているということを忘れないで欲しい。また、カチン語を話してほしい。

7. 考察

教会のすみわけは、在日カチン・コミュニティと同様である。東京には、カチン民族を中心とした大規模な教会が 2 つあり、KBC 系の教会である Tokyo Kachin Baptist Church (TKBC) と宗派を問わないクリスチャンの集いである Kachin Christian Peace Church である。一方で、聞き取りからは、シドニーを含むオーストラリアではカチン民族による政治活動が日本ほど活発ではないことが明らかになった。これには、在留資格との関連性が指摘できるだろう。日本では、難民認定やそれに準ずる人道的配慮による在留許可等を求め、故郷の内戦状況の悪化やミャンマー政府 (軍) への反発を声高に叫ぶ傾向がみられる。すなわち、カチンとしての政治活動は、日本での生き残りをかけた戦略ともとらえることができる。一方、SI 氏の指摘に依れば、オーストラリアではすでに 98% が永住権を得ており、在留が保証されているため、政治活動に関わる必要性を感じないのだと捉える。また、必要に応じてキャンベラにある大使館へ赴き、デモを行っていたそうだが、シドニーからの移動距離および費用をかけてまで参加するほどのモチベーションがあるかどうかは疑問だそう。

また、信仰活動に関しては、数回の礼拝における参与観察から日豪の比較を行うことは

難しい。しかし、LL氏は、Facebookなどで様子をうかがう限り、在日カチン民族の礼拝では、ダンス、ファッションショー、歌唱大会など始終レクリエーションの催しを開催しているという印象をうけるという。ときにそれらは本来の信仰とは離れるため、日本にいる親戚には、教会のあり方をもう少し考えた方がいいと助言しているようだ。

8. 今後の研究への展望

今回の調査では、シドニーのカチン・コミュニティの成り立ちや構成する人々の背景の一端を垣間見ることができた。また、彼らの語りからは信仰心の強さもあふれ出ていた。一方で、信仰心の高まりと移民や難民という移動を伴う経験との関係性を見いだすまでには至らなかった。多文化国家とはいえ、キリスト教がマジョリティであるオーストラリアへの移住したことが、どのように彼らの信仰心や信仰活動に影響や変化を与えたのだろうか。また、移民がエスニック集団に帰属することで民族的アイデンティティが強化され、集団内での互助関係が築かれていくという事例は先行研究でも取り上げられる中で⁵、エスニック・コミュニティから距離を置く人々を取り上げられることは少ないのではないか。

移住を機に、祖国で所属していた宗教団体を離れ、新天地では宗派によらない新たな宗教団体に所属するケースもある。移住後、所属していた同胞系の宗教団体を離れ、より多文化かつ多様性のある信仰集会に赴くようになった人もいる。

また、団体や集会への帰属が自身の信仰にたいした問題ではないという言及も聞き取りの中であった。信仰という個人の内面的側面と、移住という外的な変化をどのように捉えることができるだろうか。

9. 謝辞

この度は、グローバル協力センター主催の「途上国開発・国際協力分野国際調査支援」により、本調査を実施することができました。資金的サポートのみならず、調査者として未熟な私の背中を精神的にも押して下さったグローバル協力センターはじめ、関係者のみなさまに感謝を申し上げます。ありがとうございました。

10. 注

1. https://www.dss.gov.au/sites/default/files/documents/02_2014/myanmar.pdf (最終閲覧：2018年2月4日)

2. <https://www.homeaffairs.gov.au/about/reports-publications/research-statistics/statistics/live-in-australia/country-profiles/myanmar> (最終閲覧：2018年2月4日)

3. https://www.dss.gov.au/sites/default/files/documents/02_2014/myanmar.pdf (最終閲覧：2018年2月4日)

4. ここでいう humanitarian visa とは、“Australia's Immigration Programme”

の”Humanitarian Programme for refugees and others in refugee-like situations”カテゴリーに相当する。

<https://www.homeaffairs.gov.au/about/corporate/information/fact-sheets/60refugee#a>

(最終閲覧：2018年2月4日)

5. たとえば、天野（1999）は、ワシントン D.C.郊外のヴェトナム系カトリック教会の事例を挙げ、エスニック集団の集合的あるいは個人的なアイデンティティが言語や事物、行動などによって表象された「エスニック・シンボル」という概念を提示し、ヴェトナム系カトリック教会でのヴェトナム語クラスと伝統的祭礼（テト・セレモニー）を「エスニック・シンボル」と指摘している。また、山近（2012）は、在日ミャンマー・チン族の支援ネットワークにおける宗教施設の役割を分析し、1）居住に関する支援2）就労に関する支援3）母語文化に関する支援4）教育に関する支援5）福祉に関する支援6）在留に関する支援の6つの支援に分類している。いずれも、エスニック・コミュニティへの帰属を前提とし、コミュニティ内部の活動に着目している。

11. 参考文献

Sadan Mandy (2013) *Being and Becoming Kachin Histories beyond the State in the Borderworlds of Burma*, London: Oxford University Press

天野 剛至「エスニック・シンボルの「構築」：ワシントン D.C.郊外のヴェトナム系カトリック教会における事例研究」移民研究年報 = *The annual review of migration studies*, 6, 1999, 42-52 頁

山近 資成・後藤 春彦・山村 崇「居住支援をはじめとする極小エスニック集団の支援ネットワークにおける宗教施設の役割：ミャンマー人チン族を事例として」都市計画論文集 = *Papers on city planning*, 47-3, 2012, 955-960 頁。

聞き取り協力者一覧												
仮名	年齢	性別	民族	学歴	在豪年	在留資格	家族		所属教会		過去の滞在経験	現在の主な活動・職業など
							夫	妻	ミャンマー	シドニー		
1	ST	51	女	カチン	大学	21	C	夫(カレン)、息子1、娘1	所属なし	The Church in Sydney	渡豪前、すでに日本で就労していた兄の影響を受け、2年間日本で就労経験がある。一旦帰国し、結婚を経て就労のため再び日本に向かうが、友人の説得により急遽トラジット国であったオーストラリアで日本行きを断念し、観光ビザで入国。その後永住。	手術室担当の看護師、毎週月曜日、聖書の勉強会を自宅で開催。2016年12月を境にこれまで携わってきたミャンマー系教会での活動から身を引き、さらなる信仰の高みを目指すようになる。
2	NA	41	女	カチン	大学	7	C	夫(カチン)、息子2、娘1※夫はSYの息子	KBC	BCCに籍を置き、AKCFにも参加。	マレーシアにて2年10ヶ月を経験して、UNHCRの支援で2010年12月に渡豪。	家事・育児、AKCFの主導的メンバーとして、活躍しているが、所属はBCCである。
3	MN	39	女	カチン	大学	9	C	夫(カレン)、息子1	KBC	夫のKaren Baptist Churchに籍を置き、AKCFへはメンバーとして参加。	2008年、結婚を機にすでに難民ビザで入国していた夫を追って渡豪。	老人施設の看護師、AKCF、BCC、Karen Baptist Churchでは、Choirグループに所属し、ソロで唱うこともある。将来はミャンマーに帰国し、シドニーでの学びを故郷の発展に生かしたいと考へ、自己研鑽に励む。
4	SY	74	男	シャン	大学院	7	C	妻(カチン)、息子2、娘2 ※前妻とは2012年に死別	Yangon KBC	BCC、AKCF (Executive Committee アドバイサー)	過去、子どもが暮らしていた日本に1年未満滞在していた。その後帰国する。2004年に一度渡豪し、帰国。2010年に再び渡豪。	自治体のコミュニティ・デベロップメントに参画。フイリピン大学で公衆衛生を学び、ミャンマー政府やUNDPでの勤務経験を持つ。
5	LL	40	女	カチン	大学	10	C	独身※SYの次女。姉はSIの妻)	所属なし	AKCF	同志社大学の学部および大学院修士課程を卒業し、数年の就労を経て渡豪。	移民・難民の定住支援機関の職員。勤、AKCFの牧師、キリスト教団体でプロ歌手として活躍している。
6	LW	45	男	カチン	大学	25	C	妻(インドネシア人)、子ども3	KBC	来豪当初はBCCに通い、結婚後家族ではHillsongに所属している。また、AKCFとのかかわりは今年で3年になる。	大学1年生の時に民主化デモに参加、身の安全のために渡豪。その後永住。	学生時代からミュージシャン、写真家。KAAの創設に貢献する。
7	SI	47	男	カチン	大学	25	C	妻(カチン民族)、息子1、娘2	Catholic	AKCF、BCC	高校卒業後、留学生として渡豪。ニューサウスウェールズ州の大学で学ぶ。	システムエンジニア、AKCF-Sydney創設者かつ中心的メンバーである。

※在留資格の「C」はオーストラリアのCitizenを示す。 ※BCCはBurmese Christian Churchを指す。
 ※なお、表は調査協力者からの聞き取りデータをもとに調査者が作成した。